

広島で学び感じたこと

多摩市立聖ヶ丘中学校 1年 ^{しのざき}篠崎 ^{りの}璃乃

私が多摩市子ども被爆地派遣員に応募した理由は、戦争の悲惨さと平和の大切さを実際に見て、周りの人々に自分が感じたことと戦争の実相を伝えられるようになりたかったからです。

1945年8月6日8時15分、広島に原爆が落とされました。私はその実相を学ぶため実際に広島へ派遣員として行きました。派遣活動を通じて同じ思いを持つ仲間たちと出会い、真剣に平和について学ぶことができました。広島での活動の中でのお話で特に印象に残ったのは高村さんのお話です。高村さんは1歳で被爆し、直接の記憶はないものの、放射線による後遺症に苦しんでいました。彼の父の頭が血だらけになって帰ってきたこと、母の足に残るケロイドのことを聞くと、戦争の恐ろしさが身に染みて感じられました。また、その場で見て特に原爆の怖さを知ることができる平和の鐘や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れた際には、戦争の悲惨さを改めて実感しました。平和の鐘は、原子のマークが刻まれていて、その原子を叩いてなくそうという意味が込められています。反対側には鏡がかかれておりとなりには「自己を知れ」と言葉がかかれていました。また、この鐘は、鐘に国境のない地図を書くことで核兵器の問題が日本だけの問題ではなく全世界に関わるものであることを教えてくれました。国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、展示されている資料の数の多さや写真がとても衝撃的でした。特に暁部隊の兵士たちが体験した悲惨な状況や彼らが人々を救うために力を尽くしたことを知り、心が痛みました。彼らは最初、人の死体を持つことに苦しみましたが次第に何も感じなくなってしまうと語っていました。その話は戦争の恐ろしさを物語っています。本川小学校平和資料館では、唯一小学校で生き残った居森清子さんの文章を読みました。彼女の体験や、原爆の熱線で溶けてしまった物の展示、そして黒い跡が残っている場所を見て戦争がもたらす怖さをより感じました。

これらの体験を通じて、私は平和の大切さを深く理解し、周囲に伝える責任を感じるようになりました。広島での経験は非常に貴重なものでした。平和の大切さは、自分が知っているだけでは広まりません。周囲の人々にその重要性を伝えるために、私は知ることを続けます。今、社会で問題になっているのは、実際に被爆した方の高齢化という大きな問題です。私たちの未来を守るために、平和を築くために、平和を伝え戦争の実相を語り継いでいくことが大切です。この多摩市子ども被爆地派遣事業での学びと経験を忘れず私は戦争の実相を知らない人に伝え、平和の大切さを広めていきます。